

日本史研究の春秋

趙 建民

私が大学でレポート「日本法西斯的形成和衰敗」（日本ファシズムの形成と崩壊）と卒業論文「明治政府的産業政策与資本主義発展」（明治政府の産業政策と資本主義の発展）を書いた1960年代初期からは、もはや半世紀が経っている。思いがけないことだったが、当時のレポートと卒業論文の題目は、1980年代の改革開放後の中国の日本史学界で最も注目されるテーマとなった。

日本史研究を生涯の仕事として、78歳になった今、長年の日本史教育と研究を幸せに思うと同時に、今後も研究を続けていき、限りなく美しい夕日のように残り少ない人生を有意義に過ごしたい。

1. 日本史研究の始まり

私は1938年1月5日に現在の上海市宝山区羅涇鎮（長江の近くにあり、当時は「小川沙」と呼ばれた）に生まれた。そこは、1937年の「八・一三淞滬会戦」（第二次上海事変）の際、日本軍が最初に上陸した地域で、2,200人余の地元住民が殺戮され、1万軒余りの家屋が焼失した。そのため、私はそれを日本軍の「南京大虐殺」の源と見ている。日本軍が上海を占領し、南京を攻略して大虐殺を起こしていた時、私は産声を上げた。戦乱の中で幼少期を過ごし、小学校から中学校までである疑問を抱き続けた。古代において中日は友好関係を保っていたのに、近代になってなぜ日本は何度も中国を侵略したのか。この疑問を解き明かすために日本の歴史を学習しようと決めた。

何年間かの社会人生活を経て1959年に復旦大学歴史学科に入学した。在学中、異例にも日本語を第二外国語として習った。1964年に卒業後、復旦大学国際政治学部で教鞭を執り始めたが、「文化大革命」（1966-76年）の間、日本語版の『毛沢東選集』と『北京週報』が日本語学習の教材であった。

1979年、復旦大学歴史学科に戻って、翌1980年9月に遼寧大学日本研究所が主催し日本人研究者が担当する「日本古代史講習班」に参加した。その後、大連で「東北地域中日関係史研究会第1回国際シンポジウム」に参加し、関西

大学の大学院教授をはじめとする日本の研究者たちと出会った。私の日本史・中日関係史の教育と研究の始まりであった。

1979年からは歴史学科の基礎講義「世界中世史」と大学公開講義「中日文化交流史」を担当した。数年後、学部と大学院のために「中日文化関係史」「中日文化交流史專題研究」「日本史」「日本古代中近世史」「日本史文献導読」「日本史研究理論及方法」などを開講した。「从浙東佛跡看中日文化交流」（浙江省東部の仏跡から中日文化交流を見る）という現地調査、『日本外史』読書会、「伝統文化と現代化」などのゼミを組織して、個性あふれる教育システムを作り出した。

1983年夏、中国日本史学会が江西省の廬山で開催した「日本史教育経験交流会」において、私は中国の日本史教育研究現状が「北強南弱」である状況を説明し、簡潔でわかりやすい日本史教科書を作ることを提言して、参加者の賛同を得た。その後、「新しい枠組み、明確な主張、豊富な史料、詳簡のバランスが取れた」教科書を目指した。新中国成立40年後、大陸の学者による最初の『日本通史』が1989年8月に復旦大学出版社により刊行された。その後、台湾の五南図書出版会社が繁体字版を刊行し、再版して香港、マカオおよび東南アジアでも出版された。私はまた、日本民俗学者吉野裕子先生の講義を企画し、その後、氏の著書『陰陽五行と日本の民俗』の中国語訳を1989年に上海学林出版社より刊行した。

1987年8月、上海市対外友好協会と日中人文社会科学交流協会（有沢広巳会長）の共催で、安藤彦太郎、衛藤瀋吉両氏の引率した代表团による、「第1回中日関係学術討論会」が行われた。その後、私の提案と準備により、翌年5月8日に「上海中日関係史研究会成立大会暨学術報告会」が開催され、上海社会科学院歴史所の湯志鈞研究員が会長に、私は常務副会長兼秘書長に推された。日本国駐上海総領事館はこの研究会の成立を重視し、副総領事が総領事吉田重信氏の祝辞を代読した他、『読売新聞』でも報道された。その後、中根千枝、佐藤誠三郎、佐佐木毅諸氏を招き、「上海中日関係史研究会」で講演をしていた際には、蓮見義博総領事も来場し、中日研究者のために官邸で宴席を設けていただいた。その他、石田一良、賀川光夫、石島紀之、鈴木靖民、譚汝謙等10余名の講演会をはじめ、日清戦争100周年記念会、台湾光復50周年記念会シンポジウム、日本東海大学との「江戸時代中日文化交流」国際シンポジウ

ム、県立長崎シーボルト大学（現在は長崎県立大学）との「上海と長崎の交流」国際シンポジウムなどをそれぞれ開催した。さらに、京都浦田能楽団の訪中公演、日中桜花友誼林建設訪中団による復旦大学での桜の植樹など、積極的に民間交流を推進した。

1988年10月、北京で開催された「中日関係史国際シンポジウム」では、香港中文大学の譚汝謙先生と初めてお会いした。譚先生のおかげで、私は初めて海外へ出かけて、1990年8月に香港で行われた「近百年中日関係国際シンポジウム」に参加することができた。また、1996年11月、アメリカのスタンフォード大学で行われた「近百年中日関係暨世界抗日戦争史実維護会」（百年の中日関係および世界の抗日戦争史実保護の会議）国際シンポジウムでは、「抗日戦争期間中に中国文化財産に対する日本の略奪と破壊」を報告した。この模様は11月11日付の『星島日報』で報道された。それと同時に、台湾金禾出版社社長郭俊録氏とメリーランド大学の薛君度教授が主宰する「アメリカ黄興基金会」の助成により、「日本の中国侵略時の組織的な中国文化財破壊の史実」を研究するプロジェクトがスタートした。1999年12月、東京で開催された「戦争犯罪と戦後補償を考える国際市民フォーラム」において「南京大虐殺時の図書略奪とその返還」と題して行った報告が、アメリカの李培徳教授（Professor Peter Li）によって英訳・編集され、論文集 *Japanese War Crimes: The Search for Justice* (Transaction Publishers, 2002) に収録された。

1992年には、上海と大阪府の姉妹都市締結20周年を記念し、大阪府国際交流財団の招待により「日中文化交流講座」において「中日文化差異及其歴史原因」（中日文化の差異とその歴史的な原因）、「留学生的作用与日中両国的發展」（留学生の役割と日中両国の發展）と題して講演を行った。その後の数年間、関西大学大庭脩教授と「近世中日文化関係史研究」、慶應義塾大学山田辰雄教授と「二十世紀前半の中日関係—留学生を中心に」、早稲田大学安在邦夫教授と「十九世紀末の西学東漸に対する東アジア知識人の反応—崔漢綺、呉汝綸、福沢諭吉を代表とする教育観の比較」、鳴門教育大学高橋啓教授と「中日文化交流史の中の教育交流」などの共同研究を行った。

1993年、広島大学頼棋一教授の案内で頼山陽史跡資料館を見学した際には、拙論「頼山陽の『日本外史』と中日史学交流」を寄贈した。その縁で、頼山陽文化記念財団会長石松正二氏からの礼状とともに、『頼山陽全書』8冊を復旦

大学歴史学科に寄贈していただいた。1997年、「論『日本外史』的撰刻和在中国的流傳」（『日本外史』の著述と中国での流布）（台湾『漢学研究』14巻2期、1996年12月）というテーマに対し、日本の住友財団から「頼山陽史学思想研究」助成金を得ることができ、その成果は「頼山陽の史学思想試論」として、北京『日本学』（13輯、2006年3月）に掲載された。

1998年5月、広島県生涯学習協会の斎藤清三会長（吉備国際大学教授）が設けた特別講演会「中国人の見た日本の光と影」に際し、私は頼山陽の故郷である広島竹原市で頼山陽研究の講演を行い、『中国新聞』の取材を受けた。頼山陽の子孫、頼惟勤氏（お茶の水女子大学名誉教授）と病院で面会することができ、ご自身で編集された『頼山陽』（日本の名著28、中央公論社、1997年）と、ご先祖の頼成一（頼山陽五世孫）著『日本外史の精神と釈義』（旺文社、1944年）の2冊を恵贈していただいた。『日本外史』の中国での復刻と流布は、日本に伝わった儒学の「逆輸出」であり、中国人の日本理解を深め、中国儒学史観から西洋文明史観へと脱却する日本の一つの転換点を示している。

1999年7月、私は、上海市日本学会（郭焯烈会長）が主催した、オーストラリア国立大学 Gavan McCormack 教授の著書 *The Emptiness of Affluence* の中国語訳『虚幻的樂園』（郭南燕訳）の出版記念会に出席し、この本に啓発されて人と自然との調和的關係を重んじるようになり、日本自然史の研究に対するシーボルトの貢献を研究し始めた。2002年3月28-30日、小笠原父島で開催された国際シンポジウム「アジア太平洋の自然と人間—持続可能への摸索」（郭南燕企画）にも参加して、シーボルト研究の論文を発表した。

歴史認識の問題は中日関係にも、日本自身の発展にも関係している。2002年4月5日、植竹繁雄外務副大臣の主催によって東京の日中友好会館で開かれた「日中学者歴史認識問題座談会」では、日本側から宮本雄二、山田辰雄、小島朋之、天兒慧諸先生の出席の下、私が「従文化的認知認同中尋求更多歴史共識」（文化のアイデンティティーから歴史の共通認識を求める）と題する発表を行い、日本の学者たちと日清戦争の性質について議論した。また同年11月には、韓国釜山の東アジア教育学会、海洋大学校で「『新教科書』的要害：欲使日本重頭戦争‘雄風’」（「新しい教科書」が日本に戦争の「威風」をもたらす）という基調講演を行った。歴史は現実の教科書で、現実にも目を向けさせてくれるものでもある。歴史事実を歪曲し、侵略の本質を否認するあらゆる言動は他人の利益

を損なうばかりか、自分にも利益をもたらさない。歴史の教訓を銘記し、東アジア各国の政府や人民と友好関係を結び、和平発展への道を歩むべきだ。

以上、簡単に私の学術人生を振り返った。1998年1月、復旦大学歴史学科で定年を迎え、現在は復旦大学日本研究センターの兼任研究員、南開大学日本研究院兼任教授、中国日本史学会学術顧問、上海市歴史学会中日関係史專業委員会名誉主任を務め、日本史の研究と交流をできる範囲内で続けている。

2. 緻密に日本史を研究した30年

私の日本史研究は「中日文化の差異およびその歴史的原因」からスタートした。中国では1980年代以来、中日文化に関しては、「同文同種」という言葉がよく使われる。私は言語学、文字学、文献学などを利用し、歴史と地理環境の違いを分析して、「中日の文化は同文ではなく、同種でもない。ただし、その「不同」の中に「同」があり、「同」の中に「不同」がある。ともに東方の文化に属しているが、「同性異質」であり、異質の文化である」という結論を導き出している。

中日文化の差異は、文化そのものの差異以外に、外部の影響にもよる。最も大きな要因は、西洋近代文化が両国に与えた影響の違いである。すなわち、中日両国の西洋近代文化の摂取方法、態度、思想、認識上の差による。私の研究は、論文「中日両国的吸取欧洲近代文化之比較」（中日のヨーロッパ近代文化受容の比較研究）（『近百年中日關係論集』台北：中華民國史料研究中心、1992年）に結実した。さらに、家永三郎『外来文化摂取史論—近代西洋文化摂取の思想史的考察』（1974年再版）、伊原沢周『日本と中国における西洋文化摂取論』（1999年）を通読して、「中国在日本摂取欧洲近代文化中的作用」（日本のヨーロッパ文化受容における中国の役割）（上海『學術月刊』12号、1987年12月）、「中日両国吸取外来文化的歷史考察」（中日両国の外来文化受容に関する歴史的考察）（北京『世界歴史』3号、1989年6月）、「外来文化与傳統文化的融和」（外来文化と伝統文化の融合）（上海『文匯報』1989年7月4日）などの論文を続けて発表した。この分野における中国の研究者としての独自性を示して、それをもって国際的な対話と交流を行うことができた。

日本の西洋文化の摂取（日本では南蛮学、蘭学、洋学という）について学ぶため、1992年、関西大学東西学術研究所で近世中日文化関係史の研究を行っ

ていた時、古稀を過ぎた名誉教授有坂隆道先生のお宅に伺う機会があり、矍鑠として悠然とした議論が10時間にも及んだ。先生は私の質問に丁寧に回答し、奥様には手作りの精進料理を出していただき、先生が編集された『日本洋学史の研究』10冊と新著『山片蟠桃と升屋』（1993年）も恵贈していただいた。

有坂先生の親切な指導を得て、「我田引水から始まり、洋学を深く研究する」と先生がおっしゃったように、私は大阪蘭学開祖橋本宗吉、町人学者山片蟠桃、『歴象新書』の訳者志築忠雄に関する論文を書いた。すなわち、「大坂蘭学始祖：橋本宗吉的生平和業績」（北京『日本学刊』2号、1997年3月）、「山片蟠桃：江戸時代傑出的町人学者」（北京『世界歴史』4号、1998年8月）、「志築忠雄的『歴象新書』翻譯与儒学自然観」（上海『日本研究集刊』、1998下半年刊）である。これらは日本の洋学史における人物・著作研究の一環であり、上述した中日の西洋近代文化の摂取という研究のさらなる進展でもある。1998年10月には、早稲田大学アジア太平洋研究センターで「文化の側面から見た日本の国際化」という講演も行った。

以上の研究と深く関わるのは、留学生派遣と教育制度の近代化である。中日関係史上の3回にわたる留学ブームと、清末の京師大学堂総教習吳汝綸（1840-1903）の日本視察について、「吳汝綸赴日考察与中国学制近代化」（吳汝綸の日本考察と中国教育制度の近代化）（上海『档案与史学』5号、1999年10月）、「派遣与接納留学生的理念和事实」（留学生の派遣と受け入れにおける理念と事実）（蔡建国編『亚太地区与中日関係』、上海社会科学院出版社、2002年）を執筆した。日本最初の文部大臣森有礼（1847-89）が1873年1月にニューヨークで出版した *Education in Japan* についても研究した。同書はアメリカ宣教師林樂知（Allen Young John, 1836-1907）による中国語訳『文学興国策』として1896年に上海で出版され、中国の知識人に多大な影響を与えた。*Education in Japan* の日本語完訳は1963年になってようやく出版されている。ゆえに、英中日という三つのバージョンの比較は、歐美教育をモデルとする教育近代化を推し進める過程における中日両国の差異と原因を探求するのに役立つ、異文化の伝播と受容の現実性と可能性を探ることもできるとして、「森有礼の *Education in Japan* の中国訳とその影響—異文化の伝播と受容の現実性と可能性を論ずる」（東京『国際教育』8号、2002年10月）を執筆した。

日本の対外戦争に関して、私は「『大東亜共栄圏』的歴史与現実思考」（北京

『世界歴史』3、1997年6月)を書いた他、戦時中の図書掠奪に関して、「抗戦期間日本对中国文化財産の破壊和掠奪」(上海『档案与史学』2号、1997年4月)、「略論『南京大屠殺』中的図書劫掠」(『南京大屠殺』における図書の掠奪に関する概論)(台北『近代中国』122号、1997年12月)、「侵華日軍在浙江地区的図書文物掠奪」(寧波『天一閣文叢』1輯、2004年12月)、「占港日軍劫掠馮平山圖書館之始末」(香港占領日本軍の馮平山圖書館掠奪始末)(香港：国民教育中心網、2011年11月30日)など多数の論文を発表した。

私の「略論『南京大屠殺』中的図書劫掠」に対して、立命館大学の金丸裕一氏は「曲論の系譜—南京事件期における図書掠奪問題の検証」「批判と反省戦時江南図書『掠奪説』誕生の歴史的背景」「『南京図書大掠奪』のまぼろし」を書いて反対意見を述べた。それに応えるために、私は上述の既刊論文に「兼評金丸裕一教授關於南京大屠殺中図書掠奪的研究」というサブタイトルを付け加えて、雑誌『日本侵華史研究』2013年6月、2期に再掲載した。

大量の史実を見て、特殊な状況においては「戦争も一種の文化交流」だという結論に至った。当然、文化交流には、平等・自由・相互的な交流と、不平等・強制的・掠奪的な交流の別がある。戦争の過程における多くの文化の問題は、日本史あるいは中日関係史研究が見過ごすことのできない課題であり、それは、歴史認識、現実把握、未来予測にとって、学術的価値と現実的意味の両方を有している。

東アジア地域の文化交流は時間が長く、規模が大きく、影響が深い。1607年から1811年までの200年間の朝鮮通信使の訪日は、今でも韓日両国の歴史研究の注目点である。朝鮮通信使の訪日そのものは朝日両国の関心事であるが、その中で中国事情にもよく触れられてきた。なぜ朝日両国の使者はみな中国に注目していたのか？それについての論文「17-19世紀初東亜地区的文化交流—朝鮮通信使訪日与朝日两国对中国歴史文化的関注」(17世紀～19世紀初期の東アジアの文化交流—朝鮮通信使と朝日両国の中国歴史文化への関心)(天津『東北亜学刊』2号、2002年6月；ソウル『韓国伝統文化的反思和新探』大旺社、2002年)を書いた。これは中国の角度から試みた最初の朝鮮通信使研究であり、朝鮮通信使が朝日両国を戦争から和平へ、また和平から戦争へと導き、東アジアの国際関係に影響を与え、中朝に対する日本の態度が友好から蔑視へと転じた契機になったと指摘した。

2012年10月、南開大学の世界近現代史研究センターと日本研究院が共催した学術講座「跨文化傳釋研究」（文化をまたぐ伝播と解釈）は、多元的・開放的に時空が交錯する動的なアプローチによって、伝播側（作者）の意図と受容側（読者）の解釈意欲を俯瞰するものであった。政治・経済・外交・軍事と多方面にわたる文化的影響力が高まる中で国際的な発展と変化にも適応しており、伝統的な静的研究を新しい動的研究に変えるのに有効な方法で、実践に値する。2013年1月『東北亜学刊』に掲載された拙論「一幅近世近代中日交流的な文化地図—從『日本外史』『日本教育』中窺探跨文化傳釋」（近世近代の中日交流の文化地図—『日本外史』と『日本教育』から多文化的伝播と解釈を見る）は、この初歩的試みである。また、2014年4月に上海人民出版社より出版された拙著『晴雨耕耘録—日本和東亞研究交流文集』は、30年間の学術研究と交流を回顧・概括したものである。

以上の研究から得たいくつかの経験をここで述べよう。第一に、研究の規模は予め設定しないが、明確なテーマは必要である。すなわち、学術研究は社会発展に貢献し、社会の現実から歴史研究の問題を見出すだけでなく、歴史研究から現実問題の解決方法を探り、啓示を提供する。歴史研究は、現実問題の研究とは異なる。現実問題の研究は空腹を満たす「ファーストフード」だが、歴史研究は味も色も備えたフルコースである。歴史研究は、問題意識を強調し、根幹に遡り、斬新な論点を提出し、現実性と啓発性を備えるべきだ。現実に関心を向けることは学術の品格である。

第二に、日本史、とりわけ江戸時代の歴史と日本文化史の研究を重視しなければならない。江戸時代は日本史全体において過去を受け継ぎ、未来を切り開く位置を占めている。政治史・経済史はよく重視されるが、たとえば言えば、政治史は人間の骨格、経済史は筋肉である。軽視されがちな文化史は血液で、その重要性は前の二者に勝る。そのため私の研究では、江戸時代と文化史が大きな割合を占めている。

第三に、学術研究には常に新しい史料発掘、新しい理論、観点、研究方法が必要で、深く掘り下げ、幅広く見渡し、「マクロ的視野」で実証と比較を行わなければならない。

第四に、学術研究と交流を結びつける必要がある。私は、「上海中日関係史研究会」（現在は、上海市歴史学会中日関係史專業委員会）、「中国世界中世紀

史研究会比較史学分会」、「中国世界中世紀史研究会東亜研究中心」の設立と準備に参加した。香港大学、香港中文大学、大阪大学、神戸大学、愛知大学等と交流を重ね、1992 から 2002 年にかけて国外の大学を 50 余校訪問し、30 余回の学術講演を行った。大阪大学広田昌希教授が 1993 年 5 月 7 日に主催したシンポジウム「日中文化の差異について」で、私は問題提起者として「中日文化の差異と比較」をテーマに発表した。広田教授との交流は今日まで続いている。このように、研究と交流は互いに補完し促進する関係にある。

3. 東西文化交流においてシーボルト研究を深める

関西大学で短期研究を行った 1992 年以來、私は日本洋学史の研究に関心を持ち始め、編集担当の東海大学森陸彦教授から日蘭学会編『洋学関係研究文献要覧（1868–1982）』（日外アソシエーツ、1984 年）をいただき、シーボルト（Philipp Franz Von Siebold, 1796–1866）が日本で最も多く研究されている外国人（研究論著は 400 本以上）だと知った。1999 年 5 月、長崎を訪れ、出島資料館、シーボルト記念館、新築のシーボルト大学を見学した他、『シーボルト評伝』の著者中西啓先生と会い、シーボルト研究に取り組むことを決めた。

2001 年 9 月 8–10 日、南開大学日本研究院と東アジア比較文化国際会議の共催、日本国際交流基金の協賛で行われた国際シンポジウム「変動期的東亜社会と文化」において私は、「西方文化と日本文化撞撃出的火花—西博爾德的日本研究及其国際影響」（西洋文化と日本文化の接触による果実—シーボルトの日本研究およびその国際的影響）（楊棟梁他編『変動期的東亜社会と文化』天津人民出版社、2002 年）と題し、中国人研究者としては初のシーボルト研究論を発表した。その後も、「西博爾德：日本開国的‘第一誘導者’」（シーボルト：日本の開国に与えた最初の契機）（上海『社会科学報』2003 年 11 月 20 日）、「日本由本草学趨向植物学研究的転机—西博爾德对日本自然史両研究的貢獻」（北京大学『日本学』12 輯、2003 年 12 月）を執筆している。後者は、前述した小笠原の国際シンポジウムで発表し、「日本における本草学から植物学へ—東西交流」とのタイトルで、郭南燕他編『小笠原諸島—アジア太平洋から見た環境文化』（平凡社、2005 年）に収録された。また、シーボルト研究の第一人者である東海大学の石山禎一・沓澤宣賢両氏から、『新・シーボルト研究』（全 2 巻）、『シーボルトの生涯をめぐる人びと』、『シーボルト年表：生涯とその業績』を恵贈され、最新研究に触れることができた。

2015年2月27日-3月28日には、国際日本文化研究センターの来訪研究員として、郭南燕准教授主催の共同研究「キリシタン文学の継承」に参加した。「宣教師のアジア言語習得に貢献した華僑」をテーマに、1カ月という短い期間、インドネシアの華僑郭成章が、メドハースト（Walter Henry Medhurst, 1796-1857）とシーボルト、ホフマン（Johan Joseph Hoffmann, 1805-78）の言語習得と著作出版に協力した事実に関する史料を発掘した。これは私自身にとって研究の新しい出発点であり、日本史・中日文化関係史研究のさらなる進歩でもある。

これからの東西文化交流に関する研究を主に四つの課題に分ける。

(1) 郭成章とシーボルトの日本研究。郭成章は、広東大埔県大麻郷出身のインドネシア華僑で、文章家である。1830年、シーボルトの助手として、バタヴィアからライデンに移り、シーボルト、ホフマンと共同で6冊の「日本叢書」(*Bibliotheca Japonica*)、すなわち、①『新增字林玉篇』(1834)、②『和漢音釈書言字考』(1835)、③『千字文』(1833)、④『類合』(1838)、⑤『日本輿地路程度全図』(出版年不明)、⑥『倭年契』(1834)を編集した。①、②、③、④の4冊はすべて郭成章の署名による。6冊全体の体裁とドイツ語チェックはシーボルト、ラテン語の序文執筆はホフマン、字句配列、いろは順序の統一、修正は郭成章と、分担は極めて煩雑である。また、『新增字林玉篇』に関しては当時活字がなかったため製版の仕事も郭が担当した。彼はまたシーボルトとホフマンに中国語やマレーシア語を教え、彼らの東方言語の習得に尽力した。今後、「日本叢書」に携わった三人の努力をまとめて、「シーボルトの日本研究に対するインドネシア華僑郭成章の貢献」という論文を書く予定だ。

(2) 著書『シーボルト評伝—中国と中日関係研究を中心に』を執筆する。日文研で収集した資料によって、総合的な評伝を書く考えは諦めた。なぜなら、これまでに、呉秀三『シーボルト翁伝』(1896)、『シーボルト先生 其生涯及功業』(上中下、1896、1926)、板沢武雄『シーボルト』(1960)、ヴォルフガング・ゲンショレク著・真岩啓子訳『評伝シーボルト—日出づる国に魅せられて』(1993)、ドイツ-日本研究所編『シーボルト父子のみた日本—生誕200年記念』(1996)など、多数の本が出版されている。すでに入手したシーボルトの伝記・評伝・年表は15冊以上に上る。シーボルトは2回目の日本訪問に向かう途中、上海に10日間滞在し、徐家匯天主堂を見学した他、上海郊外で標本18種を採

集したことがある。上海と長崎間の定期航路の開通も最初に彼によって提起された。彼と中国との関わりは密接であり、著書『日本』には、中国と中日関係に関する研究が多く散在する。そのため、中国と中日関係研究を中心としたシーボルト評伝は、今まで研究されていない課題であり、中国人研究者がこの課題を担当するのは適当と言えよう。

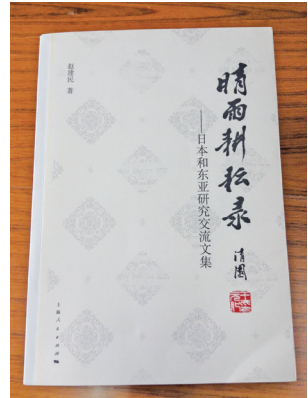
シーボルトは、1796年にドイツ中南部の学園都市ヴェルツブルクの医学界の名門に生まれた。1820年にヴェルツブルク大学の医学博士号を取得し、1823年に長崎に派遣され、オランダ商館の医師兼自然調査員を務めた。「鳴滝塾」を開設し、オランダ商館長の江戸参府に随行し、道中を利用して実地調査を行った。1830年からはライデンで日本研究に携わり、豊富な成果を上げている。1859年に上海を経由して再び日本に赴き、1862年以降、ライデン、ヴェルツブルク、アムステルダム、ミュンヘン間を往来し、各地に「日本博物館」を開設した。最後の著述である小冊子『日本博物館の概要と所見』は、博物館民族学研究の先駆けとなった。「国際人」であったシーボルトは、日本文化、日欧関係、東西交流史に大きな影響を与えた人物である。1879年に長崎公園に建てられた「施福多君記念碑」（現在長崎県立図書館前の長崎公園にある）に記されている文章「使欧洲各国知有日本者、施君之功也。使日本知有欧洲各国者、亦施福君之功也。蓋我邦絶交外国也久矣、君来我国、我邦之名大顕於彼、而彼之交際制度學術、始得其要焉。…欧洲学者称君為発見日本於學術上之人、詢不誣矣、為之銘曰：觀我国華、伝諸欧土、偉功夙成、英名万古、刻之貞珉、永在瓊浦。…」の通り、シーボルトは豊富な知識と広い胸襟と熱情を有する東西の架け橋であった。

(3) フロイスの『日本史』、シーボルトの『日本』から日本観を整理する。ルイス・フロイス (Luis Frois, 1532-97) はポルトガル・リスボンの出身のイエズス会宣教師で、最も早く日本に到着したヨーロッパ宣教師の一人である。年刊『イエズス会日本通信』を編集し、『日欧文化比較』(1585)などを著した。その代表作が『日本史』(*Historia de Iapam*)である。これは編年体の史書で、1549年にザビエル (Francisco de Xavier, 1506-52) が日本に上陸した時点から、日本の戦国末期、織豊時代までの史実が記述されている。一方のシーボルトは日本研究を行った最初のヨーロッパ人ではないが、その日本研究はヨーロッパ人の中で最も領域が広く、成果が豊富で、影響力が大きい。代表作は『日本』

(本文6冊、図版3冊)である。フロイスの『日本史』とシーボルトの『日本』とは300余年の隔たりがあるため、ヨーロッパ人の日本観の変化と特徴を知ることができる。

(4) マカオと日欧文化交流。1540年代、マカオは中国東南部の小都市から東アジア最大の商業都市へと成長した。カトリック教の日本伝播とともにヨーロッパ医学も日本に伝来した。例えば、1556年に宣教師ルイス・アルメイダ(Luis Almada, 1532–85)は日本で医術を行い、病院をつくり、「南蛮流之祖」と呼ばれている。マカオは、日本人にとって「南蛮流医術」を学ぶ重要な場所であった。ポルトガル人沢野忠庵(フェレイラ Christovao Ferreira, 1580–1652)は天文学の他、医術にも長け、長崎人豊田順庵に医学を教授した。豊田はそれだけに満足せず、マカオに赴き医学を勉強し、帰国後日本で名を馳せた。マカオでは1580年に教会が教育センターとなり、1594年には中国史上初の洋式大学「聖保禄学院」が創立された(1762年閉鎖)。ヨーロッパから日本に赴く宣教師はここで日本語を学び、日本人はカトリック教研究のためにここでラテン語を学ぶ、「東方のパチカン」となっていた。したがって、「日欧文化交流におけるマカオの位置と役割」という論文を書く予定だ。(マカオの中国返還に伴って、中西文化交流におけるマカオの役割に関する研究は増えた。しかし、日欧文化交流におけるマカオの役割は中西文化交流に劣らないものの、研究自体はまだ少ない。)

以上、四つの課題を通して、16世紀以来の東西文化交流の盛況を垣間見、日本と西洋の相互認識を深め、東西文化交流の特徴を見出すことができるだろう。そのような文脈の中でシーボルトに関する研究を深めれば、中国人研究者にとっては、日本史、中日関係史、中欧文化交流史に新しい境地を開くことができると信じている。



趙建民著『晴雨耕耘録—日本和東亜研究交流文集』
上海人民出版社、2014年

(翻訳：陳凌虹)